

半田営農(株) 代表取締役社長

福田恭衛さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「半田地区の住民全員が半田営農株式会社で結集して、農業を通じて地区全体を盛り上げていきたい」と話すのは、福知山市半田地区の半田営農(株)代表取締役社長の福田恭衛さん(74)。

同地区は市中心部から西に1・5キロに位置し、南にはJR西日本の車両基地があり、32畝の水田は、区画整備が完了し、圃場(ほじょう)1筆ごとの面積は大きいところでも20アほどしかないが、段差は少なく優良な農地が広がる。

2007年に任意組織の半田営農生産組合が立ち上がり、福田さんが3代目の組合長に就任した。就任後には、立ち上げ当初からの目標であった法人化に向けて3年間検討し、17年4月にJAや中央会、行政の支援を受け同社を設立した。この地区では水稻は全て

個々の農家が栽培しており、法人は農地を所有せず、ブロックローテーションによる小豆と小麦の栽培や、エダマメ「紫ずきん」、ホウレンソウなど多品目を少量栽培する。

法人化後、交流のある同市大江町の農事組合法人鬼の里農園からタマネギの栽培を勧められ、この冬に定植し、新たな品目導入にも積極的に取り組む。また、生産組合の立ち上げ当初から、地元の小学校の農業体験に協力し、

次代を担う子どもたちに地元の農業を理解してもらおうと食育活動にも力を入れる。

今後は法人でエコファーマー認定を取得し、安全で安心な地場産のホウレンソウやサツマイモといった学校給食用の野菜作りの拡大を考えている。福田さんは「会社を立ち上げて1年半、無我夢中でやってきた。地域農業を守り、元気にするため、もうかりそうな作物をどんどん増やしていきたい」と

話す。

しかし、福田さんは「生産組合の時から使用している農業機械が古くなり、たびたび故障して、修理にも多くの費用がかかる。機械の更新も高価なため、簡単にはできないのが悩んだ」と、なんとか機械更新できないか日々みんな話合っている。

「社長業は家族の支えがあって務まる。パートの人集めなど何かにつけて家内に補助してもらい、感謝している。今後は会社を支えてくれる後進の育成にも力を入れたい。ドローン(小型無人航空機)を使った農地の管理や農業散布など、会社として新たな取り組みにチャレンジしたい」と福田さんは家族への感謝と今後への意欲を語る。

.....

■法人所在地 福知山市字半田923の2。(電)090(7103)9970(福田さん携帯)。

■法人概要 2017年4月設立。役員3人、監査役2人、パートタイマー3人(出荷調整時)。経営面積 小豆7畝、小麦7畝、エダマメ「紫ずきん」1ホウレンソウ、タマネギ、ジャガイモ、ダイコン、サツマイモ各20ア。農業機械 穀物用コンバイン、汎用(はんよ)コンバイン、トラクター、ブームスプレヤー、小豆用乾燥機各1台。

▶半田地区の農業を支える福田さん



地域ぐるみで活性化